

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針

- 「人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。」

問題作成部会では、上述の作成方針に従い、高校生自らが人間として社会で直面する倫理的諸課題を日常の具体的な場面と関係させ、教科書で学ぶ先哲の知見を応用して批判的に吟味する力、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する力を評価できるような問題作成に努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 問1は、「十戒」の内容構成を知らない④を排除できないことから、正答率が著しく下がったと考えられる。このような誤答の作り方には再検討の余地がある。また本大問のコンセプトである「正義」に対して、諸宗教における「道徳的な正しさ」という問いを設定したが、結果宗教についての一般的な知識を問うものとなったため、別の観点からの設問の仕方もあったかもしれない。問2は、③に教科書知識を踏まえた応用的記述を誤答として配置したが、これを選択した人は少なかった。教科書知識から一步踏み出した問題を出すには、一層の工夫が求められるということだろう。問3は、コーランの資料解釈が平易であったことに加えて①bと③bの内容が類似していたことが、高い正答率の原因となったのではないかと分析している。問4は、正誤8択問題にもかかわらず正答率が比較的高かった。これは、アのキリスト教、隣人愛についての知識を問う記述が平易だったためだと考えられる。問5も9択問題にもかかわらず正答率が高かった。これは、アの仏教についての知識を問う記述が平易だったためだろう。問6は、各選択肢の中で、資料の理解と性悪説の正確な知識を同時に問うことを試みた。この設問には資料を用いて教科書知識の少し先を行くという意図があった。問7は、資料読解を通して、ソフィストとキケロの思想背景を問うとともに、キケロによって説明されるストア派の法思想についての知識を問うたが、資料解釈(a・b)は平易であったと思われる。問8は、それまでの会話文の論旨と文脈の理解を問うた上で、その展開に合致する先哲の思想や行動に関する記述を選択する論理力・考察力を問うた。思考力・判断力・表現力等を問う問題でありながら、正答率を一定の範囲に収めることができた。先哲の取組みを基に、様々な問題に対して倫理的・論理的に思考へとつなげてもらうという意図は達成されたとみてよいのではないだろうか。

第2問 日本思想における問いについての探究活動という学習場面を設定し、生徒と先生の対話や生徒のレポート、日記等と展開し、資料の読解を通して、「倫理」の基本的な知識を押さえつつ、問いの生成について考えさせることを目指した。探究活動を場面としたことについては、「日々の授業を探究的な学びに改善することを促すメッセージが含まれていた」と評価された。

各設問については、上の学習場面と関連した出題となること、及び共通テストで求められる資質・能力を問うことを意識して、各領域と時代をバランスよく出題することを心掛けた。

全体の趣旨を問うた問8のみ正答率が高くなったが、他はおおむね標準的な正答率となった。本大問全体の出題範囲や難易度については、「教科書での取り扱いが少ない思想家や用語に関するやや難しい知識問題が含まれていたものの、出題範囲は古代から近現代までバランスがよく、全体的には標準的な難易度の出題である」との評価を受けた。

問1は古代の仏教者についての基本的な理解を問う設問で、「標準的な難易度の設問」という評価であった。問2は日本の神々の基本的な性格を、代表的な神に関して問うた。個々の神についての知識を問うのではなく、日本の神々に共通する特質を知っていれば正誤を判定できる選択肢を作ったつもりであるが、「他の選択肢を誤文と見抜けるかとなると教科書レベルは超えていよう」という評価があった。問3は、念仏と救いの関係について、資料を読み取り考える問題。一遍と法然の区別がついていない受験者が多かったようで、正答率はずっと低かった。伊藤仁斎の「仁」の思想を、身近な人間関係に即して判断させた問4は、「既得の知識と資料読解を組み合わせさせた良問である」との評価を受けた。問題作成の苦労は大きかったが、今後もこのような設問の出題を継続していくことが望ましいと考える。問5は、吉田松陰の思想についての知識と、『講孟余話』の読解を組み合わせさせた設問。知識の問題の誤答選択肢として山鹿素行の「士道」を出したが、これについては「吉田松陰が山鹿流の兵学師範だったことから、ややまぎらわしい選択肢であった」という評価を受けた。とはいえ吉田松陰の業績と思想をしっかりと学習しておけば、この誤答選択肢は識別することができるはずである。問6は、明六社の思想家についての正確な理解を問う設問。「思想家の細かい知識が要求されるため、解答に迷った受験者もいたと思われる」という評価であったが、教科書でしっかり学習した受験者であれば正答を導きうる設問であったと考えている。問7では、西田幾多郎の「場所」と「絶対矛盾的自己同一」の思想の理解を問うた。シンプルな4択の問題であったが、正答率は低かった。西田幾多郎については前期思想の「純粹経験」以外の知識はあまり高校現場で扱われていないようで、西田の中期・後期の思想についてもより踏み込んだ学習機会を確保することを期待したい。問8では、三木清の『読書と人生』を読ませることで、読書の場面を典型とする問いの生成について考えさせた。正答率の高さから出題者の意図は達成されたと言えるが、結果的に平易な資料読解問題となったことは否めない。「授業で学習した先哲の考え方を手掛かりとして、資料を考察させるなどの工夫があってもよかった」という助言をいただいた一方で、『問い』をキーワードとして考える平易ながら良問」という評価も受けた。今回は共通テストになって3回目であったが、趣旨を問う問題の作成に関してはいまだ課題が多く、今後も模索を続けていく必要がある。

第3問 「自由」をテーマに、自由に関する近現代思想についての高校生の課題探究を通して、自由に関連する知識や倫理的課題についての思考力・判断力・表現力等を問うた。会話による議論と資料の読解を通じて自由はどのように実現されるのかについて考えさせ、倫理的な思考力・判断力・表現力等を深めることをねらいとした。また、高校生がプレゼンテーションを行うという場面設定から、その準備の際の対話及びプレゼンテーションでの質疑応答を通じて、自由を追究した近現代思想に学び、自由を自らの問題として捉え直し、自由の多面的な側面に目を向け、倫理的な見方・考え方ができるように工夫した。全体として、「プレゼンテーションの準備段階では先哲の思想を手掛かりに探究し、プレゼンテーション後のディスカッションと振り返りによって自由と迷い・弱さとの関係にまで議論を深めている」との評価を受けた。特に、高校生の中には、自己決定を迫られた際に、判断や思考を自ら行うのではなく自分以外の誰かに生き方を決定してほしいというような、自由を恐れて忌避する向きもある。そこで自由は、迷いや弱さを含めて受け止めて、自分らしく生きるために欠かせ

ないものであるというメッセージを込めた。

各小問では、地域・時代の偏りなく西洋近現代思想の基本的な知識・理解を問う問題、資料等から読み取った内容と教科書知識とを関連させる問題、学習プロセス全体を批判的・反省的に吟味する問題等を設定することで、大問全体で資質能力を総合的にカバーし、基礎力及び思考力・判断力・表現力等を総合的にはかることができるような問題となるよう心掛けた。「設問ごとの難易度に差はあるものの、全体としてはバランスのとれた標準的な難易度となった」との評価を受けた。問1・問2・問3・問6はいずれも基礎基本を問う問題で構成し、難易度についても極端な偏りが生じないようにした。特に問6については「思想内容の深い理解を求める良問」と評価されたが、これらの基礎基本の問題を解くことで知的財産を正しく継承していくことで、受験者自身の思考の基盤を構築できることを期待した。問4、問5、問7は資料や会話等と基礎的知識との組合せで思考を深める問題だが、単なる読解問題にならないように工夫した。問7では、自由が迷いを生じさせることに関わるシェリングの資料と、高校生と先生の会話を通じて、日常生活の中の倫理的諸課題について多面的・多角的に考察できるかを問うた。難易度としては結果的に平易なものだったが、「倫理学習の実際に即した出題」、「『倫理』の授業における探究学習の可能性を示す」ものとなっているという評価を受けた。多くの教科書ではシェリングについての記載はあるものの、思想内容にまで踏み込んで学んだ受験者は少なく、先生との対話も含めて読解することで思考を深めるという意図で問題を作成したが、原典資料の活用方法についてはさらに工夫をはかりたい。問8は全体の趣旨を問い、大問全体をまとめる役割の問題である。リード文ⅠとⅡで示されたプレゼンを含めた学び全体を振り返るレポートを読み、自由についての高校生の考えの変化・深化について正しく読み取った上で、倫理的な見方や考え方に基づき、自己の生き方を反省的に振り返ることで、倫理的諸課題を捉えることができるかどうかを問うた。「標準的な難易度でありながら深い学力が問われる良問」との評価を受けた。

第4問 「格差とその是正」をテーマに、個人と社会はそれぞれ何にどこまで責任を負うべきかを考える問題となるよう、会話文・資料・各小問を配置した。社会全体の構造にも関わる格差が各人の生き方とどう結びつくのかは、各々の境遇によっても異なり、誰もが具体的に想像して理解しやすい問題ではない。本問では、「運と努力」というテーマを軸に据えながら格差とその是正をめぐる論点を追うことで、社会の問題を個人の視点と結びつけて考えることを促すような問題構成を心掛けた。またそうして自己と他者の関わりを扱い、多様な人間観を受け容れる方向へと進んでいる現代の特質も浮かび上がらせることを試みた。

各設問については、上述の主題と関連した出題になることを意識しつつ、共通テストで求められる資質・能力を問うことを目指し、現代の倫理的諸課題、青年期の課題の各分野をバランスよく出題することを心掛けた。

大問の趣旨と特に関係が深い問題としては、問3・問6・問7・問9が挙げられる。心理学の実験に関する資料を提示した問3は、大問の趣旨との整合性は高かったものの正答率が高く、配点に比して易しすぎたかもしれない。外部評価委員からもそうした趣旨のご指摘をいただいた。この種の問題については、選択肢の文言を工夫するなどして難易度を確保することが今後も重要であると考え。問6は、大問の趣旨に即した現代の思想家に関して、教科書上の知識とともに資料の読み取り能力と思考力・判断力・表現力等を問う問題である。正答率も妥当な範囲に収まり、この型の問題としては適正な形の出題になったと考える。問7は、大問の趣旨に即した資料の読み取りを課す問題である。正答率が高くなってしまい、心理学のグラフを提示する問題では例年課題となっている点ではあるものの、引き続き工夫

が必要であると思われる。問9は、大問の趣旨に即して、会話文を読み取りながら思考する能力を問う問題である。この種の問題では例年、正答率が高くなりがちであったが、本問では適正な範囲に収まり、大問全体についての理解を問う上で一定の意味がある形を提示することができたと思われる。ただし、読み取る分量が多く、時間切れになった受験者も少なからずいたことが予想される。リード文や会話文の長さについては今後も検討が必要である。この点についても、外部評価委員からそのような趣旨のご指摘をいただいた。

その他、特色のある結果となった設問としては問2・問4・問8を挙げることができる。問2は個人の自立に関する知識を問う問題であるが、心理学者からの引用という形式に対応できていなかった受験者が多かったように思われる。外部評価委員からも、判断の手掛かりとなるさらなる材料を提示すべきだったのではないかとのご指摘をいただいた。些末な知識を問う問題と受け取られてしまったかもしれない。問4は国際社会の福祉に関する知識を問う問題である。アを正解とした誤答が多く、思想家とキーワードの結びつきだけを覚えていた受験者が引っかけたかと思われる。有名な思想家であるセンに関して正確な知識を問う上では有効な設問だったと思われる。問8は、現代の思想家に関する知識を問う問題である。ややマイナーな思想家を取り上げたため正答率は低くなったが、成績上位層の正答率は適正であった。

残る問1と問5は、いずれも標準的な知識を問う問題である。これらの問題については教科書の記述自体が薄く細かな知識を問う結果になりがちであるが、正答率も妥当な範囲に落ち着いた。

3 出題に対する反響・意見等について

高等学校教科担当教員や教育研究団体より、試験問題の内容・範囲、試験問題の分量・程度、試験問題の表現・形式等について、多面的に意見・評価をいただいている。

高等学校教科担当教員からは、「試験問題の分量は、大問4、総設問数33で昨年と同様の構成である。大問はバランスよく幅広い分野が出題内容として取り上げられており、難易度については適切である」という高い評価を得た。

またとりわけ「特に、問いとは何かを問う大問や、プレゼンテーション後に学びが深まる過程を追う大問があり、今後の授業改善の方向性が示されていたのは意義深い」と高等学校教科担当教員から評価いただいた。

教育研究団体からは、「全体を通して質・量ともに共通テスト初年度以来、同程度を維持しているものの簡単に高得点は取れないようにしているという点では少しずつ難化しているように見える」とおおむね適切であったという評価をいただいた。

4 ま と め

今年度もコロナウイルス感染予防をしながらの問題作成を余儀なくされた。様々な課題に直面しながら、新たに様々な対応策を検討しつつ、問題の作成に当たった。作業量が膨大で、なおかつ時間が限られていることから、従来 방식을合理化する工夫を加えながら、問題としての安定性を重視した。難易度においても正答の確実性についても適切な出題ができたと思われる。

高等学校教科担当教員から、「資料問題の読み取りについては、学習した知識を交えるなど授業で学んだ先哲の思想や、倫理的な見方、考え方をより一層活用する設問となるよう改善を望みたい」という意見をいただいた。来年度以降の問題改善に向けて検討したい。

基本的な知識の確認、思考力・判断力・表現力等を問うこと、高校生の学びの指針となるだけ

でなく高校生へのメッセージとなること，教育現場における改善に資するような資料を活用することなどの課題をさらに充実できるように取り組んでいきたい。またその際，問題作成方針に沿いつつ，受験者に，教科書で学習した基本的な知識を踏まえ，多様な資料を活用して考察させる質の高い問題を作っていきたい。